

Tokiko Friends vol.25

Tetsu Nakamura

中村 哲

去年の九月十一日のテロ、そしてアフガンの空爆以来、ニュース番組で中村さんのお話を何度も聞いた。誰もが興奮で浮き足立っている時に、彼の静かな視線、確かなコメントだけが心に残った。メールで彼からのメッセージを受け取り、私のホームページでも話題に上った頃、ある人が中村哲氏の「医者、井戸を掘る」という本を送って下さり、旅のカバンに入れ、読み終わったのがたまたま福岡滞在中だったのも不思議な縁。その夜筑紫野町のコンサートに「ベシャワール会」の方が来て下さり、「ほろ酔いコンサート」で募金活動をすることを決めたのだった。

そして2002年の年が明けて、ちょうどアフガンから日本に帰って来られた折りにお目にかかることが出来た。

向き合ってお話していると、思わず吸い込まれてしまうような静かな目。羊とか山羊とかラクダのようで……。遠いものを見つめ、近くのをいつくしむ人の目だと思った。

NGO 出席問題で政局の大混乱の原因となったアフガン救援会議。巨額のお金が投入されるという話ばかりで、本当にアフガンの人々が救われるのだろうかと気がかりなことだ。これまでの十数年の活動の上に続けられる中村哲さんのような NGO 活動がますます大事な時期と言える。これからの中村さんのご無事とご活躍を心から祈らずにはいられない。

Tokiko



中村 哲

1946年福岡生まれ。九州大学医学部卒業。国内の診療所勤務を経て、1984年4月パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来17年にわたりらい（ハンセン病）のコントロール計画を柱にした貧困層の一般診療に携わる。1986年にはアフガン難民のために医療チームを設立。1998年には基地病院PMS（ベシャワール会医療サービス70床）をベシャワールに建設。2001年10月には国内避難民のための「アフガンのちの基金」を設立、小麦粉と食用油の配給事業を開始。現在PMS院長。ベシャワール会現地代表。

登紀子（以下T） はじめまして、なんですけど何かお帰りなさいって感じだな。去年の九月十一日以降、何度もテレビで見ましたし、特に去年の大晦日のアフガニスタンの活動をドキュメントした番組は印象が強かったので……。どうですか、空爆後のアフガニスタンは？

中村（以下N） 何事もなかったように、仕事はつづいていますよ。人々はいつも通りの顔をしているし、魚は泳いでいるし、水草は生えているし。私はよく言うんですけど、この国の人たちはずっと戦争と一緒に生きてきたんですね。その大変さの中で淡々と暮らしを守って来たんです。

T 「医師、井戸を掘る」を読ませて頂いて、本当に感動しました。千ばつのはひどかった二〇〇〇年、一年で六六〇もの井戸を掘られたそうですね。井戸から水が出れば、いつの間にか緑が生まれ、人々が村に戻ってくる。今もアフガン復興でお金の事ばかり言われますけど、実際あの砂漠の中で生きている人々と一緒に、彼らが一番必要としているものを獲得することが大事ですね。

N 今語られている援助は、ほとんど全て都市に投入されることになるでしょうね。田舎はまたしても取り残される。あのテロ事件以来、タリバンはすっかり悪者にされてしまいましたけど、本当は少し違うんですね。彼らはアフガンの普通の田舎者なんです。西から見れば束縛だとか不自由だとかこっぴどく言われていることも実は、アフガンでは普通の慣習だった。それを都市の人にも押しつけたことで反発もあつたかもしれないけれど、今度はその慣習をすべてはぎ取って西欧化しようとしている。これも本当は問題なんです。実は七八年に社会主義政権が出来た時にも、土地解放や男女差別の解消や、教育の強制というような近代化をやったんです。あの時、反ソ運動の発端は実は、女性たちがブルカを脱がせようとしたソ連に反発したことだったんですよ。ブルカは女性たちの大切なファッションなんです。その楽しみを奪わないでくれと。

T そうなんですか。確かにあのブルカは素敵ですよ。刺繍やひだや彩りが美しい。でも顔を隠せるからソ連は恐れたんでしょうね。実はきのう「カンダハル」という映画を見て来たんです。

N あ、そうですね。どうでしたか。

T ええ、とても面白い素朴なアフガンの人々の実像が見えて、でもちよつと西側の偏見も感じられましたけど。あの中で主人公がどうしてもカンダハルにいる妹に逢いにいかなくてはいけなくて必死に旅をするんですけど、最後に花嫁を届ける

私たちの集団の中に入るんです。集団は途中からどんどん増えて、ついに検問にあうんですね。それで半分くらいの人が通行を拒否される。何故なら男だったんですね。ブルカをかぶってしまえば、男と女の区別もつかない!!

N 確かに、そうですね。いろんな意味で厳しい風土や危険な敵から身を守る役割を果たしてきたんでしょう。慣習というものはちゃんと理由があって存在しているものなんですよ。女性の学校教育がないってことも、大変な批判のもとになっているけれど、アフガニスタンの人々の九五パーセントは遊牧民と農民なんです。本当は字なんか読めなくても何ともないんですね。あの国は読み書きの出来ない大詩人のいる国ですから。

T なるほどね。あのテロリストの巣のように言われている神学校はどうなんですか。あれは、もともと田舎の寺子屋のようなものだった。これだけはどんな田舎にもあった。ここから土地の指導者が育ったんです。数学も科学も、あらゆる勉強がここで出来たんです。ソ連時代、宗教を禁止されたことで余計に宗教性が増大されて、段々原理主義になっていったんですね。

T そうなんですか。いやあ、いつの間にか私もテレビで思いこまされてることあるなあ。報道は恐いですね。

N 大事なのは、これからの時代もアフガニスタンの底力は農村にあるってことなんです。こんな風に文化に優劣をつけて、ずっとその国にあった暮らしを否定するというのには、ヨーロッパが南米のインディオたちを征服したのと全く同じ。せっかく築かれて来た農村の自給自足の存在（あ）をかたを踏みつぶして、市場経済の論理に引きずりこもうとしているだけなんです。

T 確かに、これは世界中で今起こっている一番恐ろしいことかもしれませんね。去年訪ねたインドネシアの農村でも、一年に三回もお米のとれる桃源郷のようなところなのに人々は途方に暮れている。若者はお金を求めて都市へと流出し、田舎は貧困で荒廃していく。多分、森林を徹底的に切り開いて農地に変えたのも、どこかの資本だったりするんでしょうね。桃源郷に生きているのにその恵みさえ手に出来ない。

N 私は終わりのはじまりだと思っています。

T えっ？ 世界が末世に向かいはじめたということですか。

N そうですね。残念ながら、今のやり方では未来はない。終わりに向かうだけです。何とかしなきゃいけないですね。本当に恐ろしい勢いで日本も世界も資本の論理

にふりまわされている。日本の底力も実は農村にあると私は思っていますけれど、でも戦後育ちの私たちはとりあえず、アメリカの民主化を歓迎してここまで来たんですものね。「解放して下さってありがとうございます」という風に思って……。だから、もともとあった日本の伝統の価値をあっさり捨てて来た。

N 私は加藤さんよりちょっと若いですが、父が頑固なコミュニニストで占領軍にひどい恨みを持ってましたから、「日本はこれで駄目になる」という父の怒りを見てましたよ。それで僕は子供の時から「論語」を読まされてました。

T それはすごい!! 筋金入りね。

N 私は昆虫の好きな少年でファールおじさんみたいな人に憧れていたんですけど、そんなもんじゃ許されないうです。ね。「人民のため」とか何とか言わないと。それで「無医村で働く」とか何とか理由をつけてとりあえず医者になったんです。そしてその「人民のため」の厳命を今果たしてらっしゃる。本当に大変なことをこれからもアフガニスタンでなさっていくわけですから、その現場から、日本や世界にむかって、もつともつと具体的な提言をして下さいね。私も是非、何か出来る事をやっていきたくたいです。

N アフガンへも遊びに来て下さい。ペシャワールまでは何ともありませんし、そのうち、アフガンとパキスタンとの国交も成立したら楽に入れます。ただ、私はカーブルからは撤退するつもりです。都市はもう誰かさんに任せて、私は田舎を助けたい。

T そうですね。あの本にもあったようなカレーズの泉の湧き出すのをこの目で見たんです。本当に今日はありがとうございます。

N いやあ、私はずっとファンでしたから、このCDにサインしてくれますか(笑)
T もちろん、よろこんで!! 本当に体に気をつけて下さいね。登記子倶楽部の人たちが「ほろ酔いコンサート」でたくさんの人々から集めた募金、直接お渡し出来てほつとしています。

N いやあ、本当にありがとうございます。たくさんの人たちの気持ち、ありがたいです。本当に。

T では、名残惜しいですけど、またいつかお会いできるまで……。

カレーズ：地表から穴を開けて地下の水脈をたどり小さな水路に取り込んでいく

アフガンの伝統的な水場

カーブル：カーブルのこと、現地ではカーブルと発音する